

## 式 辞

自然豊かなここ丹波高原、蒲生野ヶ原も柔らかな日差しとともに春の訪れを感じる季節となりました。

本日、令和四年度京都府立須知高等学校卒業証書授与式を挙行了しましたところ、京丹波町長様をはじめご来賓並びに保護者の皆様には、御多用の中、御臨席を賜り、高壇からではありますが、厚く御礼を申し上げます。ありがとうございます。

また、日頃より、本校の教育活動の推進に、格別の御理解と御協力を賜り、深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬ御支援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

さらに、新型コロナウイルス感染症対策については、新たな指針が示され、五月には第五類への移行となり、少しずつ感染対策が緩和されますが、引き続き感染防止への御協力の程よろしくお願ひします。

さて、ただ今卒業証書を授与しました卒業生の皆さん、卒業おめでとうでございます。

皆さんが手にした卒業証書は三年間にわたり、勉学、農業クラブ活動、部活動などに励み、様々な困難を乗り越え、積み重ねてきた成果の証であります。高校生活の全ての期間がコロナ禍でしたので、大変不安な日々を過ごされたと思います。しかし、皆さんはそのような状況の中でも冷静に対応し、それぞれの進路に向けて頑張ってきた。皆さんも須知高校での高校生活を振り返り、様々なことがよみがえっていることと思います。こうして卒業を迎えられるは、皆さんの努力はもちろんのこと、保護者をはじめご家族の方々の支援があったからだと思います。お世話になった方々には改めて皆さんから感謝の気持ちを伝えていただきたいと思っています。

さて、皆さんは四月から新たな環境のもとで、それぞれの進路先で活躍されると思いますが、社会は、新型コロナウイルスなどの新たな感染症の出現や地震などの自然災害、不安定な国際情勢やAI技術の急速な進化など、非常に変化の激しい状況となっています。今後もどのように変化していくのか、予測が難しくなっていますので、そうした社会で活躍していく皆さんに、僧侶の松原泰道さんが大切にされていた言葉を紹介し、はなむけの言葉としたいと思います。

松原さんは昭和六年に大学を卒業されましたが、その当時の日本は昭和恐慌という戦前で最も深刻な経済的危機の時代でありました。そのような状況でしたので、松原さんは大学を卒業することはできましたが、就職が決まりませんでした。松原さんは就職が決まっていない五人の仲間と何か心機一転しようと思ひ、お金をかけず、歩いて野宿をしながら旅をすることにしました。その旅の途中、万葉仮名で書かれてある歌碑に出会いました。その歌碑には「あれを見よ 深山の桜咲きにけり 真心尽くせ 人知らずとも」という歌が刻みつけられていました。その時、仲間五人で「ああ、いい歌を教わったな。これからどんな苦境にあっても、自分たちは人を騙したり、苦しめたり、要領のいい生き方はやめよう。山の奥深くに咲いた桜のように、誰が見てくれようくれなろうと、ただただ真心を尽くしていこうじゃないか。」と仲間五人で感動し、誓い合ったそうです。松原さんはこの言葉を生涯大切にされていました。皆さんも今後、社会で活躍していく中で様々な試練や困難に立ち向かう場面があると思います。そんな時こそ、真心を尽くしてこれからの社会を生き抜いて欲しいと願っています。真心を持って物事に取り組みれば、必ず見てくださる人がいて自分に良い形で返ってくると思います。

あとになりましたが、保護者の皆様、本日はお子様の御卒業おめでとうでございます。三年間の学業を立派に終え、頼もしく成長された姿に感激を新たにされておられることと存じます。私たち教職員一同、保護者の皆様の御期待に沿えるよう努力して参りましたが、至らぬ事も多々あったことと思います。お許しをいただきたいと存じます。今日までの保護者の皆様の御協力に感謝申し上げますとともに、引き続き、須知高校への御支援を賜りますよう、お願ひを申し上げます。

結びにあたり、卒業生の皆さんの今後の活躍を心から祈念し、式辞とします。

令和五年三月一日  
京都府立須知高等学校  
校長 湯川 佳秀